「え？」
一瞬自分の耳に入った言葉が理解できなくて思わず聞き返してしまった。
「お前が好きだから。お前が欲しくて俺はこんなことしてんだよ。」
「嘘、でござる…。」
「嘘なんてつくかよ。本当だ。」
幸村は政宗の言うことが信じられなかった。
「…焼き菓子、他の女子も持っていたでござる。」
女々しいことを言っていると自分では分かっているそれでも幸村には引っかかってしょうがないことだった。
「クラスの女子に俺が作り方教えてやったんだよ。お前にやったのは正真正銘俺が作ったモンだ。ちゃんと、取ってあるから取りに来るよな？」
幸村は言葉にできず、うんうんと何度も頷いた。
「幸村…。」
「政宗殿…。」
二人は互いの気持ちを確認し合うように唇を重ねた。
政宗が幸村の口腔に舌を差しこむとそれに応えるように幸村も舌を絡ませた。
幸村が唾液を飲み込み切れず溢すと政宗はそれを追うように顎へ喉へと唇で追った。
「んっ」
政宗の唇の感覚に身じろぐと幸村の衣装のファスナーが下された。
下に何も着ていない幸村の肌が政宗の眼前に曝された。
その予想以上に白い肌に吸いこまれるように政宗は口付けた。
先ほどまで舞台に立っていたせいか、しっとりと汗で濡れている。
「やっ、政宗殿っ、ちょっ、」
幸村が政宗の肩を押して引き剥がそうとする。
「ダメか？」
政宗が上目使いで幸村に尋ねる。今まで見たことのない政宗のアングルに幸村の心臓は高鳴った。
誰もいない上に回りに高い建物は無いので誰かに見られるとということは無いが、流石に外という開放感が幸村の中で抵抗があった。
「ヴッ、ダメでは、ないですが。ここは…。」
普段から色恋沙汰となると破廉恥破廉恥と連呼する幸村のことだから絶対に断られると思っていた政宗は予想外の幸村の許可に浮足立った。
「中ならいいのかっ！？」
政宗は幸村を担ぎあげると階段に向かい階下の扉の鍵をかけた。
これで、誰も校舎から人が入ることはできない。
「政宗殿、ここで？」
「ダメか？早く、お前が欲しい。」
ストレートな告白に幸村が戸惑う暇もなく、政宗が口付ける。
互いの唾液を交わしながら政宗は自分の着ていたマントを敷くとそこに幸村を横たえた。
幸村のドレスの袖を抜かせ、上半身を露わにさせて幸村の胸に吸いつく。
舌先でその頂をなぞる様に突くとぷっくりと立ち上がりそれを歯で軽く食むと幸村の体が跳ねた。
「んっ、やだ。」
「何だ、幸村、胸が感じるのか？」
まだ弄っていない方も政宗が指で転がすと同じように立ち上がった。
政宗の言うとおりそこを弄られると自分でも表現できないようなもどかしい感覚が走った。
政宗の足が幸村の股を割り、ドレスの間から股間に手を伸ばすと、幸村のそこは既に立ち上がりかけていた。
そこを柔々と政宗が揉むと幸村の顔に朱が走った。
「政宗殿、嫌っ」
幸村が羞恥に顔を染めると政宗は自分の股間を幸村の膨らみにすり合わせた。
「嫌じゃねぇだろ？俺だってお前だって同じだ。」
互いを欲して立ち上げてしまう。至極当然の性だ。
幸村のドレスを捲り上げ、下着をずらすと幸村の全てが外気に触れる。
淡い、あまり弄っていないのが見て取れる程の初々しい性器だった。
政宗は今から侵す、この新雪を前にゴクリと唾を嚥下した。
「あまり、見ないでくだされ。」
政宗の視線を感じたのか幸村がそこを手で隠そうとする。
「ダメだ。全部見てぇ。」
幸村の手を絡め取り、さらに足を開かせる。
羞恥心にうち震える姿が愛らしい。
白い太ももに紅い跡を何か所も落として、核心に向かう。